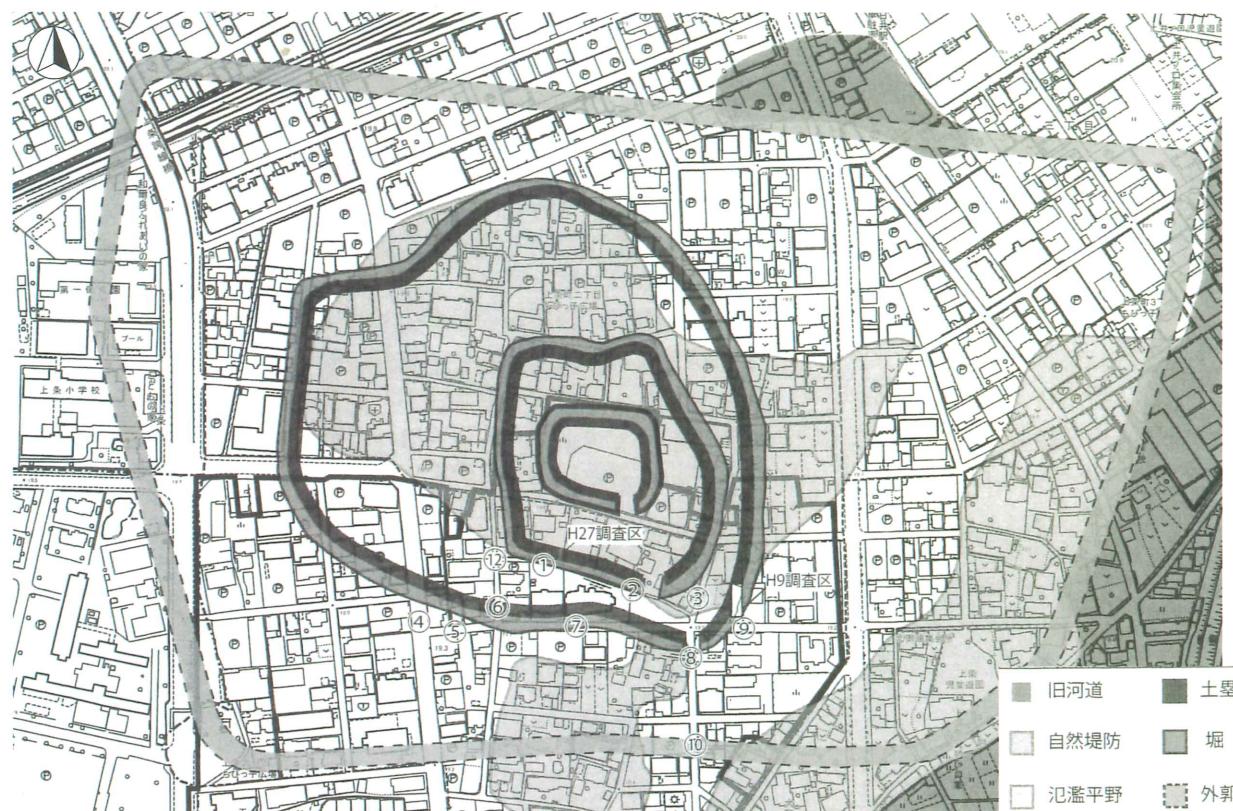




上条城跡(1/5000)「令和5年度 市内遺跡調査概要報告書」

上条城跡は1218年(健保6年)に男坂孫九郎光善の築城とされ、幕末から明治にかけて当地域の人々の生活のために尽力された林金兵衛氏の生家としても知られています。

城跡の規模に関しては『贈従五位林金兵衛翁』に記載される「上条城址之図」では「三重の堀・土塁に囲まれさらに外側に土塁があった」と記されていますが、築城時期等不明な点が多い遺跡であります。

当調査地は、庄内川の氾濫により形成された沖積地に位置し標高は約20mです。当調査でも氾濫による砂礫層が確認することができました。

本調査では、土塁内で行った約400㎡の調査区内で柱穴、土坑、溝など300基ほどの遺構を確認しました。主な遺構の時期は、柱穴群が14世紀から15世紀、溝(SD001)は16世紀中頃、大型の土坑は近世につくられたものと思われます。

土塁については、「」の字状に残っており現調査での規模は北側が東西の長さ65m、幅8m、南北方向の土塁については長さ50m、幅6.7m、南側は東西方向14m、幅5mであることを確認しています。現存する土塁頂上部から、堀までの高低差はトレンチ2で5m、トレンチ4で6mほどになります。土塁の構築方法については、中世に整地を行ったのち中核部分に黒色の粘土を盛り、その後に砂礫混りの土を積み上げて行く様相がみられますが、各箇所での積み上げ方に変化がみられました。堀の底面の幅は6.5m以上で調査区外へ広がります。土塁、堀ともに近世、近代に大きな改変が行われたようですが、その後また土塁を復元した痕跡などもみられました。

遺物は山茶碗、土師器皿、陶磁器、陶丸などが出土しました。陶磁器類は皿、碗などのほか天目茶碗、水滴、水注など茶器、書道具に用いられた多様な器種のものが出土しました。

本調査では、当地は中世(13世紀以降)から居住域としての活発な土地の利用が行われていたことが確認できました。土塁の築城時期については更に検討が必要ですが、堀内の出土遺物から、16世紀中頃には機能していたことが考えられます。また、近世の遺構としては、土塁内で大型の土坑を数基確認しましたが、居住域としてではなく他の目的での当地が利用されていた様子を伺い知ることができました。

今後整理作業を行い当地においてどのような歴史、環境があったのか検討を進めていきます。

調査協力者

王子不動産株式会社

春日井市教育委員会 文化財課

調査会社

株式会社 島田組中部営業所
〒454-0804 愛知県名古屋市中川区月島町6-1
TEL:052-369-1677 FAX:052-369-1678
<http://shimadagumi.co.jp/>





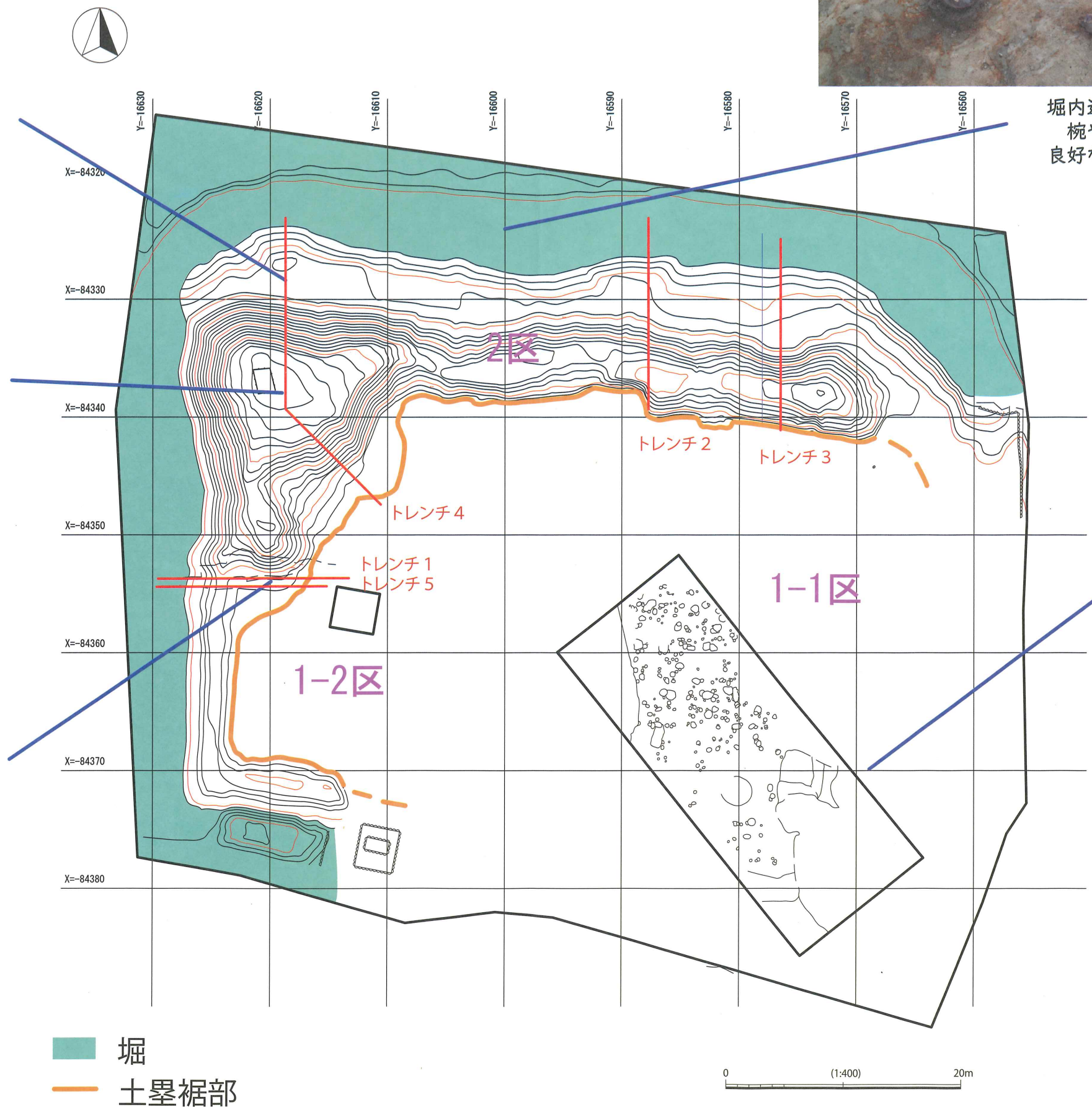
堀内の土の堆積状況
近世以降に堀を掘り返している部分が多くみられました。



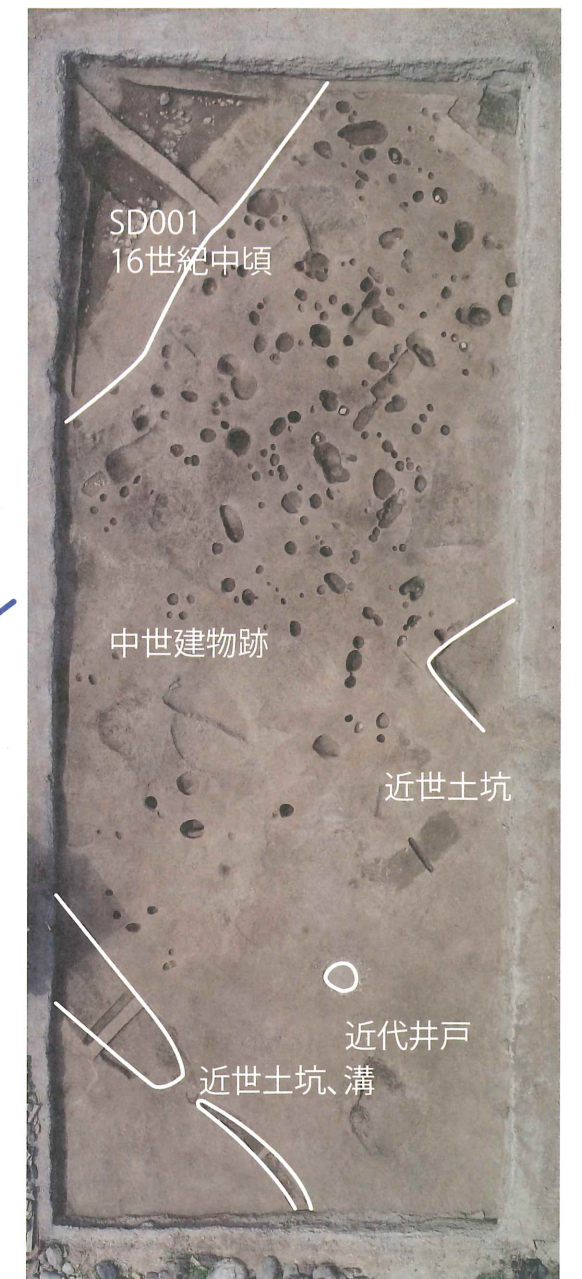
櫓部頭頂部平面状況
この部分は、櫓があった可能性のある位置になります。櫓の痕跡は現在確認できていませんが、調査区内の土塁ではみられない拳大の礫を多く検出し、この部分を安定させる状況がみられました。



土塁堆積状況
土塁を構築する前に当地では整地が行われています。土塁の構築については、中心部分に黒色の粘土を盛る他は、各トレンチで積み上げの様相が異なっていました。



堀内遺物出土状況
碗や皿のほか、お茶や書道に使われた器などが良好な状態で出土しました。



土塁内の状況
遺構は柱穴、土坑、溝など約300基を確認しました。その多くは建物の柱跡です。全てが同じ時代のものではありませんが、中世に何度もこの土地が居住域として利用されていた様子がみられました。

上条城跡遺構平面図(土塁、堀は調査前の状況)